

平成29年9月28日(木)

老球の細道359号

## 審判をリスペクト

会津バスケットボール協会 室井 富仁

テレビ「NEXTフジ」で先日まで2017ユーロ選手権大会が放映されていた。旧ユーゴスラビアの小国スロベニア(人口約200万人)がスペイン、セルビアなどのバスケット強国を破る番狂わせで初優勝を成し遂げた。ゲームの内容はもちろん素晴らしかったが、驚いたことに日本人の審判(プロデビュー)がユーロリーグに派遣されて笛を吹いていることだった。NBAプレイヤーに臆することなく厳しいジャッジをしていたことに感心すると同時に、日本の審判のレベルも世界クラスになってきたことを実感した。

一方、8月のインターハイや昨シーズンのBリーグのゲームなどで前会津地区審判長の芳賀聡氏(現福島県審判副委員長・S級審判)が重要なゲームを審判員として裁いていた。ちょっと前までは会津地区の審判員が日本のトップレベルのゲームをジャッジするということは考えられなかった。それを思うと誇りであり、今後も育ててほしいことを願う。

審判は、ゲームにおいては縁の下の力持ちであるが、審判の適切なジャッジがなければ、コンタクトの激しいバスケットボールのゲームは成立しなくなるだろう。審判の力はゲームの成立に大きく影響する。だから審判のジャッジに対しては誰もがミスなく公平であってほしいことを願う。しかし、審判も人の子である。時折誤審があるのはやむをえない。

Jリーグにおいて先月不幸な誤審が起きた。反則に関わっていない選手にレッドカードを示し、その選手が無実の退場処分を受けた。審判がレッドカードを示した時点で「誰が反則をしたか」が審判の頭から飛んでいたようだ。選手に「誰なの?」と聞いても「審判が決めることだ」と選手から協力を得られなかったという。私も審判でファールの笛を吹いた後、誰がファールをしたか忘れてしまったことがある。高校生くらいだと「誰だっけ?」と聞くと素直に「僕です」と手を挙げてくれるので助かった。

スポーツは政治と違ってクリーンな世界であると思っている。実際に反則をした選手が「私がやりました」と申し出れば問題はなかったのに、残念ながらプロの世界ではそんなことは理想論だと一蹴されてしまう。ここでも「知りません」「記憶にありません」か。

ところで、バスケットボールの審判でよく問題になるのは、審判の判定にクレームをつけるコーチの姿である。下手な審判にジャッジされるコーチの気持ちもわかるが、どんな判定であれ、コートの上では審判の判定は絶対であり、最終的であり、翻られない。コーチは選手の前では「審判批判」をしてはいけないと自戒している。

コーチよりも問題なのは保護者の審判批判である。最近も保護者の方から「あの審判のせいで負けた」という話を聞いた。一生懸命やっている子どもたちのことを考えた親の気持ちもわかるが、子供たちの前で審判批判は禁物である。大人たちが審判を批判する言葉を聞いた子どもたちは審判に対するリスペクトを失うだろう。そして親に対しても・・・

ゲームを作り出すのは選手、コーチ、審判である。お互いにリスペクトをする文化があれば誤審のみならず、審判に対する色々な問題は少なくなるのではないだろうか。

スポーツマンシップとは何か。それはルールを守り、ずるいことをしない「フェアプレイの精神」と、相手チームの選手、コーチ、自チームの選手、コーチ、そしてゲームを裁く審判に対する「リスペクト精神」であると思う。